

夕映え

『山茶花』 81-1号

目鼻<sup>やま</sup>欠け道に坐します野佛の羞しき表情誰に譬へむ

夕映えは恣に空を焼く混沌としてわが未来冥しも

風止みて樹々らの饒舌はたと絶ゆ不意なる静寂に慄然とす

拭き終へて透明でありたしガラス戸に重たく貼りつく晩秋の空

歩み来てこの岐路に踏みとどまりぬ疑ふことなく今日は立冬

喝采

『山茶花』  
81-2号

訣れ来てうすき流れの街川に落とすともなく落とす哀しみ

何為さむ老いの意識に凭れつつ居間のソファーに瞑るほかなく

捨てきれず結句にこだはる冬空に星はそれぞれ位置に煌めく

闇ふかしみは瞠りたる瞳に風のごと死者のひとりが寡黙に顕てり

自縛ともこの日常より逃れ得ず敢へて一生の喝采うとやとなさむ

省みて

『山茶花』  
81-3号

灯らざる径の暗きを歩みつつわが摸索する園は更に遼<sup>ふか</sup>くて

殊更に音ひびかせて爪を切る日なか日ぐれの冬の静寂

わが脳裏かけ巡る老いの一文字<sup>うた</sup>否定しつつ生くるも悲惨

記憶すら覚束なくてましてをや明日の行手の今は恃めず

ひそかにもみづから省みる日もあり身は装ふとも裡なる纏<sup>つづ</sup>り

落の臺

『山茶花』  
81-4号

いちはやく春を見付けたる悦びよやさしき陽ざしに落の臺つむ

落の臺いぢらしきまでの苦さなり椀に散らせばほのぼのと春

赤き実は大方失せし冬の庭敗者のご辿く荒涼に行つ

あるときは自らを癒やし虐げてひと生よ孤りのわが物語り

この後は何を希まむ足りたれば悠々闊歩の夢より目覚む

はからずも出遇ひたる人と初音ききそれより二人の歩調そろひ  
て

降るともなく止むともなくきさらぎの雪の気紛れわが瞳を奪ふ

舞ふごとく漂ふごとくきさらぎの雪降りながら地に届かざり

沈丁はたまらざるまでの香を放つ消息のなきまま逝きたる人よ

いつせいに天を目差せる花こぶし頑なまでの意志つつむごと

訣れ

『山茶花』81-6号

はらはらと泪のごとく散るさまよ<sup>ぬし</sup>主なき庭の今年のさくら

還り来し死者かと思ひぬ花影に佇みるれば佛の頭つ

はからずも出遇ひたる人と初音きく二人の歩調いつよりか合ひ

草冠のぞけば母となる春苺香き記憶の中の乳房にも似て

購ひたる黒バラソルに入目避け逢ひたきひとは死亡罪欄

小判草

『山茶花』  
81-7号

たつぷりと甕に挿したる八重ざくら余る程なる春の奢りぞ

薰りつつ風は野に光り今の身に駈けたきほどの衝動もなく

小判草蹴散らしてゆくこの不遜生きるてわれに何の科ありや

きらきらと陽に光り耀やく小判草われに長者の風格纏へと

幾度も聴き返さるる昔立ちよ不得要領に終へたる電話

黒蝶

『山茶花』  
81-8号

恙なく生き存らへる身の倅よ坂道に来てこのためらひは

執拗に紫陽花をめぐる黒揚羽自在なれば咎め得ずして

出遇ひたるに咄嗟にその名浮かばねど人は羞しきもの言ひをする

出かかりし言葉素早く呑みこまむ切なきまでの感情抑へて  
こころ

何気なき言葉ときけど亦ひとり人を喪ふかなしみの五月



あぢさる

『山茶花』  
81-9号

五月園見通せぬ世にあぢさるの色衰ふまでを生かされて

むらさきのいよよ色濃きあぢさるは競り合ひながら個々の貌持つ

ひそみるる猫の目の光る五月園わが孤独を覗き見るがごと

明日の日は恃みなけれど夕映えはこころの掬りどあぢさる天し

帰り来てひとりの家に点す灯よ父とも耀ぬくやき母とも温く

百合

『山茶花』  
81-10号

俯きて何を思索の白百合よ添ひて香りを嗅ぎたきものを

山百合の鋭きまでの芳香よ風が運び来てわれを酔はしむ

才媛と謳はれてゐし友なれどひら仮名多きこの頃の便り

お迎へを待つばかりと云ふ姫の頬てらてらと耀やくほどに

はからずも夢に遇ひたる亡き夫よ四十年経たるもなほ若くして

秋の風

『山茶花』  
81-11号

透明な秋を運びくる風あり窓のガラスは磨いて待たう

あした  
朝より身近なるものの耳障り笛吹きケトルのけたたましさ

軀のつかれこころの疲れ帰り来て余剰なるものことごとく外す

夕映へは明日のあくがれしつかりと老いのかで大地を踏まふ

自らに老いの急情をゆるしゆくこの身の哀れ枯野に佇ちぬ

木犀

『山茶花』  
81-12号

存らへて何んの生甲斐トーストにジヤムを厚く塗るよりほかなく

木犀のただよふ徑に歩み来て香を纏ひたくしばし佇む

木犀の香をかき消しつづ降り来るを無情の雨と書き添へし文

夕焼けを眩しむ老いの視野の中明日と言ふ日をいきいき生かす

取柄なく落葉掃くのみの唯一散りつくすまでこの軀保つや